

やさしい「エ・テユ
(e t t u)」

「鉄村先生、あなたもですか？」

鉄
村
春
生

一、大学人としてともに生きて

遠い、遠い昔日のことで、そのときの状況は記憶の片隅に小さくうずくまって、いまひとつ定かでない。その薄明のなかにあって、いつも新鮮な響きと潤いをもって回想できるのが、武田ミキ学長（当時）のおことばと眼差しである。

昭和四十二年の暮れも押し迫ったころであった。そのころのわたしは草創期の広島文教女子大学文学部英文学科にあって、すべての面で過分に恵まれていた。文教女子大に上質の英文科をつくりあげようと意気に燃えて集まったなかで、大先達の浅地昇先生は別格にして、小川登・小田忠・中川厚武・藤本隆康の諸先生方に囲まれて、人間関係において申し分ない生活に酔い痴れていた。小川先生にはどんな要求も笑顔で応えていただいた。小田先生からはいつも切れ味鋭い発想で虚を突かれたが、その度に敬服の念が増大した。同学年でありながら、中川先生には兄貴にたいするように甘えさせていただいた。藤本先生にはへば碁の道の先輩面を許してもらった。教え子たちはまだ一年生と二年生ばかりで、伝統造りに若い瞳をさらさら輝かせていた。

このような、なにごとにも替えがたい研究・教育の環境とそして初志とを、わたしは道半ばにして突然、棄てようとしたのである。現在の職場に勤めるためであった。

なぜ可部を離れようとするのかという仮想の詰問にたいして、わたしが用意していた答えは、人間環境が佳すぎることから、がそれであった。もちろん、これはわたしの勝手な言い分であることは重々承知したうえでである。それでも、武田ミキ学長に可部を去る理由を質されたとき、そう答えるしかないかと覚悟をきめていた。

わたしはこのなんの根拠にもならない言い訳を携えて、附属高校の敷地にあった学長の瓦葺きの私宅に赴いた。玄関の戸を引いて訪れを告げると、話ができる方へとという気さくな返事があって、わたしは外側から、ガラス戸を

開けたお部屋へと回っていった。最初からガラス戸が二、三枚開けてあったところからみると、冬の暖かい午後であったのであろう。学長は部屋のなかでいつものように和服を召しておられた。そのころは再発したお腰の調子がまだ完全に癒えてなかったので、炬燵のなかからの会話であった。

少時、勤めの具合などを世間話の形で交わしているあいだに、学長はわたしの用向きを察しられたようであった。「じつは、学長、このたび、ぼくは……」と、わたしは身体をこわばらせながら本題に入った。

その瞬間に、冒頭に書いた学長のおことばが聞こえてきた次第である。そのあと、わたしと同年度に異動のあった先生を思い出すことができないように、なにを話し、なにをお答えしたのか、まるで記憶が消えている。しかしながら、やわらかな口調を耳にしたわたしがふと目をあげると、そこには、わたし個人の事情をご賢察くださったのであろう、武田ミキ学長の優しい視線が待っていた。それは、「武田学園を離れても、教育だけはしっかりやってくださいよ」と、家出息子を励ます目であった。申し訳なさに途方に暮れていたわたしにとって、丸縁の眼鏡の奥にあった、励ましと優しさと寛容の眼差しほどありがたかったことはない。忘れられない。懐かしく記憶に刻まれている。あの慈愛の眼差しこそが、人を育てる人の目、というのであろう。

爾来、あの慈眼に育てられつづけているわたしである。

深い感謝の念をこめて、武田ミキ先生のご冥福を心からお祈りいたします。